

小島朋之先生を偲んで

加茂具樹

2008年3月4日、小島朋之先生が享年64歳でご逝去された。アジア政経学会の第15代理事長を1997年10月から2年間にわたって務められたことを含めて、生前の先生のご活動は、もうすでに多くの方によって偲ばれている¹⁾。先生の指導を得た学生1人として、あらためて先生を偲ぶ文を書くことに気後れする。

そもそも私たち学生は、小島朋之先生のご活動について、じつはよく知っていないのかもしれない。現代中国政治専攻の学者のお1人として、日中関係を中心とする東アジア国際関係に関するオピニオンリーダーのお1人として、中国への環境保護協力に尽力されたお1人として、そして大学行政を担われたお1人として、先生が八面六臂の活動をされていたことはよく存じ上げている。しかし先生は、ご自身の活動について、私たち学生にお話しくださることはほとんどなかった。学生は、先生がお書きになった文章を「発見」し、ようやく先生のご活動を知ることが常であった。

一方で私たち学生は、小島朋之先生が学問において強く意識されていたことは何であったのかをよく知っている。

小島朋之先生は、私たち学生のために必ず週1回、大学院生研究会を開催してくださった。それは、はじめて体調を崩される2007年の2月まで変わることはなかった。先生のもとには、現代中国研究に取り組む者だけで

なく、東アジアの国際関係研究や安全保障研究を深めたいと志す学生が集っていた。そのため、研究会では現代中国研究だけでなく、様々な分野の研究書を輪読した。小会員にとって強く印象が残っているのは、修士課程在籍中に、ポール・A・コーエン著（佐藤慎一訳）『知の帝国主義——オリエンタリズムと中国像』（平凡社、1988年）を輪読したことである。同書を読み進めるうちに、アメリカにおける中国近現代史研究の系譜や、同研究の深化と直面する問題点に言及しながら、「歴史」という観点から、学問における客観性という問題の難しさと重要性を語る口調が次第に熱を帯びていったことを思い出すからである。

こうした輪読のほか、学生が交代で自身の研究報告をおこない、小島朋之先生はこれに忍耐強くご指導下さった。そのとき先生は、しばしば「真ん中の真ん中」という言葉をつかわれた。私たち学生は、自らの問題意識に関連する重厚な先行研究を前にして、無意識に、あるいは意識して、研究対象を良くいえば「絞り込み」、悪くいえば「小さく、狭く」していく。こうして研究の隘路にはまってゆく。そうしたとき先生は必ず私たち学生に対して、この研究の意義、研究をつうじて自らが設定した問題意識に本当に答えることができるのかと厳しく問われた。研究というのは、問題群の「核心」を捉えることなのであり、「真ん中の真ん中を研究しなさい」とおっしゃるのであった。研究に没頭し、新しい事

実の発掘や細かい事実の著述に熱を上げているなかで、そうした問いかけが、研究の方向性を見失わないためにとても重要であったことを、今になって一層強く理解する。

この夏、偶然にも“Studies of Chinese Politics in Japan”と題する小島朋之先生の新しい論文を「発見」した²⁾。先生は、同論文を執筆されていたことについて、生前一度もお話することはなかった。論文は、日本における現代中国政治研究の動向を紹介し、今後の日本における現代中国政治研究に対する先生の期待が述べられていた。やはりそこにも「真ん中の真ん中」を研究することの重要性を指摘される先生がいらっちゃった。思えば、先生のはじめてのご著書である『中国政治と大衆路線——大衆運動と毛沢東、中央および地方の政治動態』（慶應通信株式会社、1985年）において先生は、現代中国政治研究の核心的な問題群のひとつである中国共産党の政治権力の分析に取り組みまれておられた。まさに先生は、終始一貫して「真ん中の真ん中を研究すること」を強く意識されてこられたのである。

小島朋之先生が示された研究の姿勢を、どのように発展させてゆくのか。私たちは、それを実践してゆく方法論について先生と議論をしてみたかった。しかし、もはやそうした問題について先生と議論する機会を永遠に逸してしまった。とても残念である。そう思いながら、一人ひとりが「真ん中の真ん中を研究すること」の意味を考え、それを実践しようと試みるのが、先生を偲ぶことになるのだろう。

(注)

1) 例えば Ryousei Kokubun, “In Memorial: Tomoyuki Kojima, 1943–2008,” *China Quarterly* No. 194 (Jun 2008), pp. 424–427. 「揮不去的中国情結」『明報』2008年3月9日。阿部純一「小島朋之先生を偲ぶ」『東亜』(財団法人霞山会) No. 490号、2008年4月号、44–51ページ。家近亮子「小島朋之先生との近現代日中関係史研究」『アジア政経学会ニューズレター』No. 30号、2008年8月10日号、1ページ。

2) Tomoyuki Kojima, “Studies of Chinese Politics in Japan,” in Robert Ash, David Shambaugh and Seiichiro Takagi (eds.), *China Watching: Perspectives from Europe, Japan And the United States*, New York: Routledge, 2007, pp. 132–146.

(かも・ともき 慶應義塾大学)